
キ オ ク

美菜彌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キオク

【Nコード】

N0723F

【作者名】

美菜彌

【あらすじ】

この物語の主人公、風凜華魅麗ふうりんかみれいは、姉の冬彌ふゆみの通っていた憧れの学校である“桜坂学園”に入学！そこで出会う人物たちと楽しい学校生活を送ることとなった。魅麗はここで一体何を学び、何を残せるのか。魅麗の華やかな高校生活が始まるのです。

第1話：はじまり（前書き）

こちらの作品は気まぐれで文章力のない者によって書かれた物語です。なので、文章の表現や誤字・脱字などがあつた場合は見逃していただければと思います。

では、暇潰しなどにどうぞお読み下さい。楽しんでいただければ光栄です。

第1話：はじまり

とある春の晴れた日。私はこの日がとても待ち遠しかった。

だって…今日から私は高校生になれるから……。ずっと憧れてた、姉と同じ制服を着れるその日を……。でも、やっと叶ったよ。お姉ちゃん。

心のなかで、此処にはいない姉に話しかける。姉の優しい顔が、私の頭の中をいっぱいにした。今は会えないけど、会った時には私の制服姿を見せてあげるね。

鏡の前に立ち、くるりとそこで一回まわる。少し遅れてスカートがひらり。この制服は姉が着ていたときからずっと可愛いと思っていた。そんな制服と私は釣り合っていない気がした。だって…まだ中学生って感じのオーラが出てるんだもん！！

少し大人ぶった表情を作ったがそれをすぐ崩す。そして頬をぷうと膨らまし、ぺしんと叩いて潰す。

何落ち込んでるの！！これからじゃん！！まだ中学生みたいなのは仕方ないよ！！

自分に気合いを入れて、きつと待っているであろう母のいる一階へとおりていくことにした。

寝室のある屋根裏部屋から、キッチンのある一階まで小さい梯子と螺旋階段を使っておりていく。

キッチンのある部屋の扉を開くと、朝食の美味しそうな匂いと、いつも母が飲んでいるコーヒーマーの香ばしい匂いが私に染み込む。そんな心地のよい空気を愉しんでいると、母の声が聞こえる。

「何そんなとことに立ってるの？ご飯が冷めちゃうよ？」

いつも通りの優しい声。その声のするほうを見ると優しく微笑む

綺麗な顔がある。

自分の母親の顔なのに“綺麗”なんておかしいかもしれないけど、これは本音。私はお母さんみたいな美人になりたいと思っている。……そして、姉みたいな美人にも……。

私は母に返事を返し、朝食の置いてあるテーブルのもとまで寄って、椅子を引きそこに座る。私は思い出したように母に、

「おはよう！」と元気な声で言うと母は落ち着いた声で返事を返してくれた。

「いただきまあす！」

「はあい、どうぞ。」

こんな毎日の当たり前のやり取りはやっぱりいい。心が落ち着いた。

私が美味しく朝食を食べていると、急に母から声がかかった。

「今日から高校生ね。その制服、とっても似合ってるよ。」

その言葉は、とても嬉しかった。似合っていないって心配してたところだったから……。

「きっと卒業までには冬^{ふゆ}彌^みより似合うようになってると思うわあ。」

「まあ、卒業って……入学式もまだ出てないんだよ？早いってば。」

入学式を前に少し緊張していたのに、そんな風に言われて少し可笑しかった。

朝食を綺麗に食べ終えて、身支度を終わらせ、いつでも学校に行

けるようにして、私は外に出た。

外に出ると、眩しい朝の気持ちいい日差しに、澄んだ空気が私を出迎えてくれたような気がした。こっちの方には人が滅多に來ないから、此処を独り占めしている気分だ。

長い長い坂道の途中にある私と母の家。そこからの景色は最高！きれいに並んだ町並みがおもちゃみたいになさくて、可愛いらしい。この町には海も山もあるし、それらを全部まとめて眺めることができるんだからとっても気に入ってしまった。

そして家を出て、坂を上っていき、家の裏側までまわる。そこにはとても広い草原が広がっている。此処に立っていると、自分がとても小さく見える。でもそれは虚しいっていうよりも、のびのびとした広い心持ちになれる。だから、此処も好き。

草原にくる途中には別れ道があって、その道を真っ直ぐ進んでいくと、小さな森のような場所がある。そこには小さい頃に、何度か来たことがあった。

そもそも長い長い坂道に広がるこの世界は、母方の叔母の所有している土地なのだ。

こんなに広い土地を持っているなんて凄と思う。私がこっちの方の学校に通うことを知って、此処を貸してくれると言ってくれたのだ。でも、そのお陰で、私はそこまで朝早く起きなくて済んだし、バスとかの機関を使わなくて済んだ。だから叔母さんには感謝だ。

私は、小さな森の方に向かって歩きだす。こんなにいいところなのに人が滅多に來ないのは、きっと私有地だからだ。

森の入り口の前で一旦立ち止まり、先に進んでいく。
ゆっくりとした歩調で奥に入っていく。

懐かしいような

新しいような

そんな

不思議な感覚

ある程度まで森の中に入ったところで視界にピンクがはいる。さつきまでミドリばかりだったので、そちらを振り向く。そしてつい言葉を漏らす。

「綺麗……………」

円を描くように生えるミドリと、中心に優雅に佇むピンク。その光景は初めてで、見とれていた。私のココロを虜にするそれ。つい絵でも描きたくなる。

ぼーっと眺めていると後ろから明るく元気な声が神秘的な空間に響き、此処はやっぱり現実の世界なんだと我にかえる。

…って……………。

「誰!？」

ぼーっとしすぎて話しかけられたことをスルーしてしまうところだった。

誰もいないはず…誰も来ないと思ってた。

だけど、声があったことは人がきたってことだ。しかも男の人の声だから、母でもない。

まあ、立入禁止ではないからいてもおかしくはないけど…。ここに人ってくるんだあ。

そんなふうに思っていると……………。

「ああ、悪い。俺は^{おおそら}大空 ^{たくま}拓魔って言うんだ。」

元気で明るい声。その声の持ち主は拓魔くんっていうんだ。

後ろをゆっくり振り返ると、私と同じ服を着た男の人がそこには立っていた。スマートなのに筋肉がしっかりついた身体。顔立ちは華があり整って、カツコイイと思う。髪は明るい茶色の中に赤や金、オレンジ色がところどころに混ざっている。

私がじつと彼を観察していたのが気まずかったのか、彼は口を開いた。

「ええ…つと…君は…？」

そうだった。相手に聞いておいてまだ自分は名乗っていなかった。私は慌てて名乗る。

「あたしは風凜華 ふうりんか 魅麗 みれい、はじめまして。」

そうあいさつをすると、向こうも

「はじめまして！」と笑顔で言ってくれる。

「俺さあ、よく此処にくるんだあ。でも人にあつたことなかったから、誰も来ないのかと思ってたんだ。」

そう言い終えると、こちらに近づいてきて、私の横に並ぶ。やっぱりこの人…凄く背が高い。それに近くで見てもカツコイイし。

「魅麗ちゃんは此処、よく来るの？」

“よく”かあ…。引越したばかりだから、“よく”ではない。しかも借りてるとはいえ、今は私たちの土地だし…。

何て答えようと考えていると、彼が少し首を傾げる。

「どうしてんな難しい顔してんだよ。あっ、俺…ヘンなことでも聞いたか？」

難しい顔…してたんだ…私…。言われて気付く。

「変なことなんて、何も言ってないじゃない？ 黙っててごめんね？ 何て言っていていいのかって…そう思ってたの。」

私の言った言葉に“？”を浮かべたような表情をする。やっぱり、おかしいかな…？今いったこと。

沈黙を彼は破るように言った。

「てかさあ、お前も俺と同じ高校なのな。スゲエ偶然だよな！！」

満面の笑みを向け、そう言う彼。あまりにも明るすぎるその声に笑ってしまった。彼は怪しむように……

「なっ！？……何だよ……。お前が難しく顔してるから話題かえたら笑い出しやがってよぉ…ヘンなヤツ！！」

そう言い終わると、彼は私の頭をがしと乱暴に掻き回す。髪型は酷く崩れてしまったのに怒りなどの感情はなく、かわりに親しみのような心地よい感情でいっぱいになる。

不思議だなあ…。彼とは、ずっと前から仲が良かったみたいな感覚になっている。

私は思い切って頭に思い付いたままに話してみることにした。

「ちっきの質問……」

「えっ？」

笑っていた私が急に喋り出したからか、目を丸くして手を止めた。

「小さい頃から、此処には何度か来たことがあったの。でも、貴方みたいにずっとじゃない。けどもう此処は私の大事な“モノ”になってる…。」

私が話し終えたのを確認して、彼は質問をしてきた。

「私のって…どういう意味？」

彼は少し困った顔をしてるように見える。

それはそうか。今まで自分がずっと来ていたところを自分のモノと宣言されたんだから。

きっと此処が叔母の私有地だって知らないんだろうなあ…。

「実は此処って、私の叔母の私有地なの。」

「へ……………？ そなの……………？」

あ…。やっぱり知らなかったか。それもそうだと思う。此処って私有地に見えないし。“市民の場所”って感じだし。私だって初めてきた時は信じなかったし。

「それで、叔母さん、優しい人だから、此処を今は私達に貸してくれてるの。高校から実家までの距離、かなり遠くて大変だから…。」

笑顔でそう言うと、彼はしばらく目をパチパチさせてから、
「なるほど」と呟く。わかってもらえたみたい。

「それで何て言っていていいか困ってたのか。今は自分の家だもんな、よく来るとかの次元じゃねーもんな！」

明るい声が耳に響く。そして、綺麗な笑顔を見せてくれる。

「ごめんー！」

いきなり謝る彼。私は不意打ちだったので、きつと変な顔をしたと思う。

「何で…謝るの？」

何とか絞り出した声。上擦っているのが自分でも恥ずかしいくらいにわかる。

「だって…俺…他人ヒトの土地に侵入してたってことだろ？…何年も…。」

顔を赤くしながら言う彼が、何だか可愛いく見えてしまい、駄目だとわかっていても笑ってしまう。

……だって…絶対可笑しい！長身の綺麗でカッコイイ顔立ちの高校の制服着た男の人が、小学生みたいに頬を染めながら言ってるんだもん。釣り合っていないし！！

でも、彼の気持ちはちゃんと伝わった。それに……。

「いいんだよ？だって此処は立入禁止じゃないんだしさ。それに、こんな場所があるってわかったら私だって毎日来たい！！って思うしさ！ だから、いいんだよ？ 今までだって…そして、これからもねー！」

思ったままのことを伝えると、彼は嬉しそうな顔をした。

「なあ…俺等。もうダチ…だよな!？」

「もちろん!」

私たちはお互い微笑み合った。

「なあ…お互いさ、親しみの気持ちを込めて、NMで呼び合わね？」

ニックネーム

NMかあ…。いいかも!それ!

「いいねえ、喜んで!」

私は笑って親指を立てて、オツケーの手を作り、そう言った。

彼はたちまち笑顔になる。この人の笑顔って人を凄く虜にする力があると思う。実際、私は虜になってしまったし…。

そう思っていると、声がかかる。

「普段さあー、NMで、どんな風に呼ばれてる?」

「アタシは“みい”とか、“れい”かな?」

真っ先に思い付いた、よく言われてるNMを挙げる。すると……

「やっぱり在り来りはつまんねえし、俺が呼ぶからには、人が呼ばないのにしねえと…。」

うーん…あんまり恥ずかしいのにならないといいなあ…と思いなから様子を伺う。

「よし！決めた！！」

パアっと、花が開いたような表情をする彼が少し眩しい。

「なにになに??」

「れっちゃん！！！！」

「へっ!?!」

自覚する…。今、凄い間抜けな声出したって…。何か…恥ずかしい。

「……………ダメ?」

小動物のような凄く心配してる声と表情。…可愛いなあ。男の子なのに。

「駄目なわけないよ！！ 凄く嬉しい！ ありがとう！」

そう言うと、彼の安心した表情が目飛び込む。

「じゃあ、俺は“くっちゃん”な！！」

自分で言って、少し恥ずかしくなったのか、頬を赤くしてる。そんなところも可愛いと思う。

「いいねえ、“くっちゃん”！！」

私も言ってみて恥ずかしくなった。でも、それは心地いい恥ずかしさ。

「俺のことそうやって呼ぶヤツいねえから…二人だけな…？」

ヒミツゴト。

そんなに重大ではないけれど、二人だけってのが凄く嬉しい。

「じゃあ…私のこともそうやって呼ぶ子いないから、二人だけね。」

笑顔を向けてそういうと、さっき私が手で作った、親指を立てたカタチを作り、

「当たり前!!」と言ってくれた。

今まで男の子と、こうやってあまり話さなかったから、少し新鮮な感覚だった。

その時だった。

「あっ…メールだ…って!!!」

「どうしたの？」

呑気な私の問い掛けに、慌てた様子で携帯の画面を見せてくれた。そこには、少し寒気がする事実があった…。

「ち…遅刻…!!!」

入学式の日遅刻なんてアリエナイよ!

私は彼の制服の袖をガシッと掴むとそれを引っ張り、走り出した…。

走って、はしって、ハシッテ…。

長い坂道を勢いよく下った。何度か躓きそうになるが、転ぶことはなかった。どんどんスピードが付き、長かった道のりもあっという間って感じがした。

くっちゃんと私の自転車がある場所までつき、勢いよくブレーキをかける。そして少し息を整えてからお互い自転車にまたがった。

「よしっ!! 行くぞ!!」

「うんっ!」

私達は目一杯に自転車のペダルを漕ぎ、私達の目的地である“桜坂学園”へと向かった。

第1話・はじまり（後書き）

小説をご覧下さいましてありがとうございます！

精一杯書かせていただいた仮想世界の下らない話ですが。これからもよろしくです。

第2話：楽しい会話

しばらく自転車を漕いで、狭かった道路から、広い道路にでる。すると、同じ格好をした人たちを見つけ、少しだけ安心した。

「ああ〜…。つ、疲れた〜…。」

「ホントだねえ。お疲れ様！」

くつちゃんはハンドルに体重を預けるようにもたれかかる。まだ“お疲れ様”なんて早いけど、こんな様子を見ちゃったらそれしか声がかけれられない。

「れっちゃんって、かなり足早いね〜。ビックリだよ。」

疲れた顔で軽く笑顔を作りながら私に振り向きそう言う。まあ、よく、みんなに言われる。私って運動は“出来ない”っていうか“しない”ってイメージがあるらしい。汗が似合わないと言われたこともあるし…。

「よく言われるよ。でもね、アタシ…。」

「なにになに?？」

くつちゃんのさっきまで疲れた顔が嘘のような満面の笑みが私に向けられる。

「実は、中学のときは陸上部に入ってたんだ。あ、ちゃんとした選手だったよ?？」

少しおどけたように言ってみせると、凄く驚いた顔をされてしまった。まあ、それも結構慣れたけど……。

「マジかよあ……。すっげえなあ……。全然見えねえし。」

「もう！ くつちゃんまでそうやって言うんだ！」

少し困らせたくてわざと怒った風にいつてみた。

すると、すぐに

「ゴメン！！」と慌てて言ってくるものだから可笑しかった。

「なあに笑ってんの……？」

「ごめんね？ 大丈夫だから。さっきはちょっとからかってみたくなって……。」

笑いながらそう言ったら、くつちゃんは

「ンだよ」と安心したような表情で笑った。

くつちゃんって、いちいち表情が面白い。だからちょっとだけからかいたくなっちゃった。

「でも、人は見かけによらねえな。俺でもさっきはついてく大変だったし……。」

“俺でも”ってところが少し気になった。くつちゃん、何か中学生のときやってたのかな？確かに、きれいに筋肉はついてるけど……なんだろう？

私が急に黙りこんだのを見て、不思議に思ったのか、不安そうにきいてきた。

「どした？ 具合でも、悪くなったか…？」

「違うよ。ただ、気になったことがあってね…。」

「ン？ 何だよ？ 言ってみるよ。」

優しい笑顔だったので、きいてみるとこにした。

「何か中学生のときに運動してたの？」

「おっ！！よくわかったな！！！」

何だか、急に嬉しそうな顔になった気がした。

「何やってたの??」

くつちゃんが中学生のときにやっていたこと。何故だか凄く興味が沸いて来た。気になる感じ。私の知らないくつちゃんのこと、少しでも知りたいのかも。

「俺さ、小さい頃からずっとテニスやってたんだ。中学の時には全国を目指すくらいだったんだ。」

テニスのことを話すくつちゃんの目は凄く輝いていた。夢を語る少年の瞳だった。

「まあ、実際はさ…全国は無理だったけど、そこそこ活躍したんだぜ?。」

そのあとに“なーんてな”と付け足すと、悪戯っ子のような笑顔を見せる。

くっちゃんには素晴らしい目標があるんだな…。そんな風に思った。

そういえば、“オオゾラ タクマ”って何処で聞いたと思ったら、全校集会で校長先生が言ってたんだ。この町から大きな大会にでる人がいるって話だった。

「うちの学校でも、結構話題になってたの…今更だけど、思い出したよ。」

笑いながらそういうと、くっちゃんは凄く嬉しそうな顔をした。

「マジで！？ うわあ…嬉しいなあ…。」

本当に嬉しいんだろうな。見ていて伝わってくるよ。

「れっちゃんはさあ、何処の中学校行ってた？」

「アタシは浜咲中学校だよ。」

「嘘お…マジかよ…。」

何をそんなに驚いているんだろう。私…変なこと、言った覚えないよ。

「あつ！？ …悪い。浜中って頭いい奴ばつかじゃん？」

いきなりそうきかれて、少しビックリした。自分の通っていた中学校を、そう思ったことは一度もなかった。だから言われてもピン

と来ない。

「れっちゃんって…確かに勉強出来そうだもんなあ…。」

「そう見える??？」

「ああ…。何か急に覚えてきた。」

出身校って、そんなに人のイメージを変えちゃうんだ。でも、確かにそれは言えてるのかもしれない。でも…中学校だしなあ。

「まさかあの浜中で有名になれるとは、嬉しいぜ!!！」

くっちゃんはそう言って笑った。そして私も笑う。

「くっちゃんは何処の中学校に行ってたの？」

「俺か？」

「うん！」

私は大きく首を縦に振る。

「俺は桜坂中学校に通ってたんだ。だから高校も桜学を選んだし。」

“桜坂中学校”。そこは、部活動（特に運動部）が強いことで有名で、部活で良い成果を残した生徒は学費や入学金免除などの待遇で、桜坂学園に入ることができるのだ。軽くエスカレーター式みたいなところがある。そのため、桜坂学園には桜坂中学校出身の生徒が多いのだ。

「そうなんだあ。凄いね！推薦で入学したの？」

「まあな！親も学費が安くて助かる〜とか言ってたしな。」

桜中の生徒だったんだあ。何て思っていると、くつちゃんから質問される。

「れつちゃんは何で高校、桜学選んだんだ？もしかしてスカウトされたとか！？」

くつちゃんが興味津々といった風にきいてきたのが可笑しかった。

「スカウトなんて…。私は桜学のことずっと憧れてたから、ここにしたの。」

「憧れ？」

くつちゃんが不思議そうな顔をしながら首を傾げる。

「そう！憧れ！私のお姉ちゃんがここに通ってたから…それで、この高校が気になって…。入学できたらなあって憧れてたの。」

ずっと心に抱いていたことを、恥ずかしいけど、くつちゃんに話した。すると…。

「いいなあ…。そういう理由も。俺は長男だから、兄弟に憧れるなんてないし。」

何かを懐かしむような、少し哀愁のある表情を向けられ、少しド

キツとした。

「くつちゃんには…弟や妹がいるの？」

「ああ、生意気な弟が、一人いるよ。しかも今、ソイツと暮らしてる。ってーか、勝手についてきやがったんだ。」

少し眉間に皺をよせ、怒った表情を作る。でも、どこか、楽しそうにも見える顔だった…。そう、それは“兄”の表情^{かお}だった。

「お父さんやお母さんは？」

「あー……………」

今度は困った顔してる…。きいちゃ…まずかったかな？

「そもそも、俺は一人暮らしをしたかったんだ。」

くつちゃんは私に話してくれるみたい。失礼なときいたんじゃないかとよかつた…。

「それで、両親に『一人で暮らす』って言ったんだ。はじめは心配してたけど、認めてくれた。でも…弟だけは反対しやがってよお…。はじめは一人暮らしを満喫してたのに、一週間くらいたった頃に、『俺も此処に住む！』ってきやがった。親は止めただけで無理だったって…。」

くつちゃんは一通り話し終わると、

「はあ…」と溜め息をついた。…何だか大変そう。でも…。

「楽しそうだなっ。」

と、思った。

一人暮らしをしたかったくっちゃんの気持ちもわかるけど、私はどちらかというと、弟の気持ちがわかった。だって…、大好きなお兄ちゃんが急にいなるなるって…寂しいことだから…。

「まあ、賑やかかって意味では楽しいけどよ…。一人暮らしをして、独り立ちしたかったくっって意味では、何かなあーって思うよ。親も心配だし…。」

「親…？」

具合でも悪いのかな…。いや、だったらくっちゃんのことだから一人暮らしなんてしないと思う。じゃあ…どう心配なのかな？

「そ。だって俺の両親さあー、俺一人いなくなるっただけで大変だったのに、さらに弟までついてきたら…寂しさのあまりやっていけないんじゃない…。」

「ふふっ…。あははっ!」

私はつい笑ってしまった。本当に楽しそうな家族だ。それに、くっちゃんの親が凄く可愛い!

「お前…今馬鹿にしただろ!」

「してないよ!」

そんな抵抗を無視してくっちゃんは片手で私の髪の毛をぐしゃっ

とした。

「俺を馬鹿にした罰だ。」

ちよつと威張った風に言うくつちゃん。…本当に馬鹿になんてしてないのになあ…。

「そんな家族、楽しそうだなって、思つて。羨ましいなって。」

「はあ？ 何だよ。普通の家族だろ？」

「だって…私のお父さん、海外にいるからさあ…」

そう。私にとっては、両親が二人そろって普通の会話をしてるっただけでも、羨ましい話だった。

「それであ。悪いな、馬鹿にしたなんて疑つてさ。」

くつちゃんは気まずそうに謝った。

「全然いいよ。ただ、馬鹿になんてしてないってわかってほしかっただけ。」

「もう疑つたりしねえよ。」

そう言うてくれて、本当に嬉しかった。

「そうだ！ 今度俺ン家に来ねえ！？ うるさいくらいに賑やかな弟と歓迎するぜ？」

「えっ!?!」

「あつ!?! …… やっぱ嫌だよな…。 今日知り合ったばかりのヤツにこんなこと言われるの…。」

別に…嫌じゃないのに……。寧ろ私なんかを家によんでくれるなんて、凄く嬉しいのに……。普通、会ったばかりの人を家に招こうなんて思わないんじゃないかな?

「そうだ! 今日俺ン家に来ねえ!?! うるさいくらいに賑やかな弟と歓迎するぜ?」

「えっ!?!」

「あつ!?! …… やっぱ嫌だよな…。 今日知り合ったばかりのヤツにこんなこと言われるの…。」

別に…嫌じゃないのに……。寧ろ私なんかを家によんでくれるなんて、凄く嬉しいのに……。普通、会ったばかりの人を家に招こうなんて思わないんじゃないかな?

「嫌だつたら断っていいんだぜ? ただ、さっき弟のこといいな—
みたいに言ってたからさ。」

「じゃあお家に遊びに行かせてもらおうね!」

「いいぜ! …… じゃあ、今度の日曜は?」

「大丈夫! じゃあ日曜日に…。 何処で待ち合わせしようか?」

私の心の中は、朝からとても明るい色に染まっていた。これもくっちゃんのお陰だな…。

「じゃあ、俺がお前ン家行くな。」

「いいの?」

「ああ! じゃあ10時頃行ってもいいか?」

「いいよ! じゃあ楽しみに待ってるね!」

「おう! 期待してるよ!」

“期待してるよ”か……。うん、楽しくなりそう!

約一週間前、叔母さんに家を借りてこっちに来た時は荷物の整理とかで忙しかったし、学校生活がとても不安だった。しかし、今、くっちゃんとかうしている、その不安は小さくなっていった。こんなに楽しい友達が出来て、私はついてるな…。

こんなたわいのない会話をしていると、あっという間に学校が近付いていた。

此処からは長い坂道を登らなくてはならない。でもとても緩やかな坂だからまだマシかな?

「れっちゃんと話しながらだったから、此処まであっという間に感じたよ。」

「アタシもだよ!」

「この坂道を登ればもう学校だな。……同じクラスだったらいいな。」

「
「うん！」

くつちゃんが同じクラスにいてくれたら安心できるし、何より楽しそうだな。そんな呑気なことを考えていると、あることに気付いた。

それは…視線。くつちゃんをみんなが見ている気がした。確かにカツコイイと思うけど、これは異常だ。まるでアイドルがいるみたい。

そんな私に気付いたのか、くつちゃんが話し掛けてきた。

「どうした？　んなキョロキョロしてよっ。　怪しいぞ。」

ふざけた感じだったけど、きっと心配してくれたのかも。

「ねえねえ…みんながくつちゃんを見てるよ……。」

声のトーンを少し抑えてきいてみた。

「ああ…。中学でテニス部に入った時からこんな感じだけ？　……始めは変に感じたけど、今はなれた。」

くつちゃんは何でもないって感じで、サラッと言った。…凄いな。

「あれ？　…れっちゃんは経験ナシ？　れっちゃんくらいの容姿なら経験アリかと思ってた。」

…普通ないんじゃないかな？私、くつちゃんみたいに周りを明るくするような性格じゃないし……。

「きつと、くつちゃんが特別なんだよ。」

私がそういうと、くつちゃんが“意外”というような表情で言った。

「でも……俺にはれっちゃんにも視線が集まってるように見えるぜ？」

「なっ……！？」

“何言ってるの！！”って言おうとして、言葉が詰まる。

私何かに視線が集まるわけない。だって、この学校って、大半の人が桜坂中学校の生徒だし……。私は有り得ないよ！！

そう思っていると、誰かの会話が耳に入ってきた。

「ねえねえ！！ あそこの二人……！！ たっくんと風凜華さんじゃない！？」

「ホ……ホントだあ……。二人そろってると画が綺麗だよね……。」

「てかさあ、二人って仲いいのかなっ？」

「何か羨ましいなあ……。」

………何か今………私の名前出なかった！？

何……なに……ナニ！？

「なっ？ お前も見られてるだろっ？」

くつちゃんも聞こえてたみたい。

何か悪戯っぽい表情で笑って、そんな風に言われちゃったよ…。

「れっちゃんってば、鈍感だなあ〜〜。」

凄い笑われてる……。そんなに笑わないでよ〜。

私が恥ずかしくて何も言えず、大人しく自転車を漕いでいると、もう学校前だった。

視線が余計に集まる。視線に気付いてからは変に意識してしまう。くつちゃんみたいに慣れてないから、かなり困る…。

自転車置き場に自転車を停めて、玄関の方に向かっていく。クラスを確認するために。でも、人が沢山いて近付けないや…。

「まだ結構人いるな。遅刻じゃないだけマシだな。」

「そうだね。これも頑張って自転車漕いだからだねっ！」

「そうだな。……あつ、こっちに廻ったらクラス発表の紙、見えそうだぜ。」

くつちゃんが手招きをしているので、そちらに人とすれ違いながら近付く。

確かにそこから紙は見えた。

そして…私のクラスは…。

「あつた!!」

二人の声が同時に響く。お互い顔を見合わせて笑った。

「れっちゃんと俺…同じクラスだったな!!」

「そうだね!!」

私は凄く嬉しくって、つい彼の手をとっていた。そしてそれを思い切つきり上下に音がなくなるくらいに振った。

「ははっ…。そんなに喜んでくれるなんて…俺、スゲー嬉しいわ。」

照れくさそうにそう言ってくっちゃんは笑った。とても爽やかな笑顔……。この笑顔を教室でもみれるんだ。そう思うと、幸せだった。

そこで私は冷静になった。いつまで手を握ってるつもりなんだ？
って……。私は慌てて手を離れた。

「ごめんなさいっ!!いきなり……。」

弱い声でそういうとくっちゃんは、笑顔で言った。

「全然いいぜ?……嬉しいしさ。」

「よかった…。嫌だっと思われなくて……。」

「そんな風に思っわけないし。でも…ビックリはしたかな?」

にっこり笑ってくっちゃん。そんなくっちゃんを見て感じる……。とてもいい人だなあ…って。

「ホント…ごめんね?」

「ンな謝ることじゃねーだろっ？ ……たださ、そんなに元気なれっちゃんみれて…嬉しいよ。」

「えっ……。」

……そんなこと言われたら…照れちゃうよ……。

「何かクールって感じでさ…俺みたいな馬鹿といってもつまんない！
！って思ってるんじゃないかって…ちよっと気になったからさ…。」

「そんなこと思っわけ…それこそないのに……。」

貴方と出会ってから、此処にたどり着くまで、ずっと楽しいって思ってたから、そんな風に言われて凄く驚いた。

そんな風に見られてたなんて…ちよっと私って無愛想なのかな？

…何か…急に…心配になってきた……。

「そっか…。なら、安心。俺ばっか楽しんでたとしたら…ちよっと虚しいなって感じだし…。違っってわかってよかったぜ。」

優しい笑顔が、とても眩しく見えるよ。くっちゃんっていつも素敵な笑顔を見せてくれる。軽く微笑むような笑顔や、元気一杯！
って感じに、真っ白い歯を見せて笑う顔も本当…素敵だな…。

「れっちゃん？ ……どーした？ ポーっとしてよ？」

「えっ!？」

どーした？なんてきかれても…“笑顔が素敵だからずっと見てた”
なんて…恥ずかしくて言えないよ!!

「頬つぺも少し赤いみたいだし…熱でもあんのか?」

「うわっ!?!?」

っ。今変な声出した! ! 此処周りに人いるし、聞かれてたら恥ずかしいよ! ! …聞いて…ないよね? って

もっと心配すべきことを今されてるじゃん! ! だって…だって…
…。くっちゃん、私のおでこに…手当ててる! !

何か…身体…動かない。と言うより、動けなくなってる…。

私の様子がおかしいことに気付いたくっちゃんが、慌てて手を額から離れた。…。ちよっと寂しいかも…。

「ゴメン! ! …俺…癖でつい…。」

癖で…? つい…? 何でそんな動作が癖になるの! ? やっぱ
りくっちゃんってモテそうだから…それなの?

…みんなにもやってるってこと…かな?

何でだろう…。急に悲しい気持ちになっちゃった。さっきまで、
あんなに楽しかったのに…。何で…? ?

“トクベツ”じゃなくて、“ビョウドウ”だから…?

でも…いいじゃない…のけ者扱いよりは…よっぽど、いいじゃない…。
い…。

ココロが痛む、そんなシユンカン。

「おいっ! ? れっちゃん! ?」

何…? 何なの…? もっ…。

「みんなにも…してあげるんだ。」

なっ、何いつてるの!？勝手に口が動くから…。そんなこと言うつもりじゃないのに…。まだわからないのに…。

「えっ?何のこと…? てか、怒ってるのか…?」

「そうじゃ…ない。ただ…。」

「ただ?」

「くっちゃんにとって、女の子に触れるって当たり前だったの…かな?って…。」

あーあ…。言っつもりなんて、なかったのに…。どうして…言っちゃうの?

こんなこと言いたくないよ。この気持ちって…何?別に馴れ馴れしいとかは、思ってない。私だって、さっき手握っちゃったし。そうじゃない。

だとしたら…何だろう。
私が考え込んでいると、くっちゃんが申し訳なさそうに口を開いた。

「何のことがよくわかんないけど、当たり前何かじゃない。今でこ触っちまったのは、お前が心配だったからで…。その…誰にでもとかじゃ、ない…から。」

「くっちゃん…。」

私…くっちゃんを困らせてる…。ごめんね、くっちゃん。本当は

…そんなこと言つつもりじゃなかった。

「ありがと…。心配してくれて。熱は…ないよ？」

「そっ…うかも…。」

小さくなるくっちゃんの声。そうだよね…いきなりそんなこと言われたら…ビックリしちゃうよね。

「俺がさっき“癖でつい”って言ったのはさ…。」

聞きたくないかも…その先の言葉なんて。

「俺の弟がさ、ちびの頃、頬つぺたが赤い時って、だいたい熱あったんだ。」

…え？ いきなり…何の話？

「だから…れっちゃんも熱があつて辛いんじゃないかって…無理してんじゃないかって…。それで、つい…。」

「…そうだったの？」

「ああ。ゴメンなっ。んなこと、ガキでもねーのに、嫌だよなっ。」

「そんなことない！」

私つてば…ただの勘違いか…。なのに…くっちゃんに変なこと言つて困らせて…駄目だなあ。

何か…くっちゃんといると、つい感情的になっちゃうっていうか

…くっちゃんの雰囲気にもまれてる…？

でも…くっちゃん相手だから素直なことが言えるのかも…？

「そっ…そうか？ ……でもさっき」

「あー！！ わー！！ もういいのー！！」

それ以上言われたら恥ずかしくって、今よりも真っ赤になっちゃ
うー！！

「れっちゃんがそういつなら…やめる。」

フー…。助かった…。

「そろそろ、校舎の中に入る？」

「そうだな。行くぞ！！ れっちゃん！！」

私たちは校舎の中に入っていった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0723f/>

キ オ ク

2011年1月4日04時19分発行